



全農教

日本帰化植物友の会通信



NO.15 [2016年9月30日発行]

輸入物資に随伴する帰化植物

水田光雄

帰化植物の侵入は、外国から輸入される物資などに混入、付着して非意図的に持ち込まれ生育するものがある。筆者はこの非意図的に持ち込まれるものが、どのような輸入物資や方法で侵入するのかに興味を持ち、長年調査してきたが、今回、その一端を紹介する。

輸入香辛料

神戸市南部の港湾倉庫の一倉に、輸入香辛料が保管されている専用倉庫がある。筆者は1995年から、毎春この倉庫周辺の帰化植物を調査するなかで、他所ではあまり見ることができない特殊な種類を記録している。上記の専用倉庫には、主にコエンドロ、コロハ、ウイキョウ等が保管されており周辺はスパイシーな匂いがする。当然のことであるが、意図的に輸入されている上記種が荷役中の荷こぼれにより植え込み内、縁石の間隙、空地等に生育している。港湾清掃で除草されることもあるが、年によりコエンドロ等のお花畑に出くわすこともある。

2015年までに当該倉庫周辺で記録された種類については以下のとおりである。

なお、種の同定に当っては、植村修二氏にご指導いただいた。

○新記録種1：モロッコヤグルマギク (図1~3)

Centaurea pullata L.

キク科の一年草~短命な多年草で南欧から北アフリカ、トルコ等に分布する。当該生育地では草丈50cm位であ

る。葉は無毛で下部では羽状に切れ、上部は切れ込みが少なくなる。頭花は3~4cmとなり、舌状花は淡紅色で先端が5裂する。

植村修二氏が当該生育地で採取した幼株を栽培し、上記の種と同定された。和名は、コエンドロの輸入先がモロッコであったことにちなみ水田が新称した。

○新記録種2：シラユキキンギョソウ (図4)

Misopates calycinum (Vent.) Rothm.

本種はゴマノハグサ科の一年生草本で地中海沿岸の原産であるが近隣諸国へも分布する。当該生育地では草丈は50cm程度に成長したのも確認できる。植え舛、道路脇では、10cm程度で花(蕾)をつける個体もある。花冠は唇形(仮面状)、長さは2mm前後で同属のアレチキンギョソウ *Misopates orontium* (L.) Raf. よりも少々大きい花をつける。花色は白~クリーム色であるが、下唇弁には、紫色状の縦縞模様が入る。また、花卉つけ根も紫色に色づく。

筆者は、1995年5月20日、今回の場所とは別の香辛料荷役場所で1株採集していた。その後、香辛料専用倉庫付近で、2000年から6回(年)、最近では2014年5月3日、開花株で3,4株生育を確認している。発見当初、植村修二氏が幼株を採取して栽培し同定した結果、本種と判明した。白花品のアレチキンギョソウと区別するため、和名を「白雪金魚草」として水田が新称した。



図1 モロッコヤグルマギク、生育期('11.4.27, 箕面市栽培品) 図2 モロッコヤグルマギク、花('11.6.5, 箕面市栽培品) 図3 中央の蕾がモロッコヤグルマギク、コロハとコエンドロが混生('11.5.5, 神戸市)

○新記録種3：ツノミマツバゼリ (図5)

Scandix australis L. subsp. *microcarpa* (Lange) Thell.

本種は地中海沿岸原産のセリ科一年生草本である。草丈は現地での生育環境が悪く20cm程度で、1本立ちの状態では生育していた。環境がよければ40cmほどになり、茎は斜上し分岐する。葉は2～3回羽状に分裂した複葉になる。花は白色で、2mm前後。果実はナガミゼリ (*Scandix pecten-veneris* L.) に似て散形花序となるが、本種のほうが開状した形になる。果実の長さは2cm位で1つの花序に8～15個程度をつける。和名は、特徴的な果実の付き方から「角実松葉芹」として植村修二氏が新称した。

○新記録種4：イボミヤムグラ (図6)

Galium verrucosum Huds.

本種は南欧、北アフリカ、西アジアに分布するアカネ科の一年生草本である。草丈は生育のよいものは40cmほどになるが、当該生育地のものは、15cm程度であった。葉は長さ2cm程度の披針形で少々光沢があり、表面には棘状突起がある。花序は集散花序で白色の花を3～5個つける。果実は4mm程度の大きさで、表面に円錐状の突起(いぼ)で覆われた球形をしている。2010年5月8日に1株が生育していたもので、果実の特徴から「疣実八重葎」として水田が新称した。

以上4種の新記録種の他、輸入香辛料倉庫周辺で記録された帰化種を表に示す。

輸入原木

ケミヤコグサ *Lotus subbiflorus* Lag.

本種は、欧州原産のマメ科1年草である。全農教の日本帰化植物写真図鑑第2巻の初版および増補改訂版では筆者が執筆を担当した。平凡社の日本帰化植物図鑑111頁には、同種を和名「セイヨウヒメミヤコグサ」として記載されている。これは1985年、香川県丸亀市の米材(ベイマツ等)貯木場で、高松市の方(主婦)が採集されたものを、当時同定を担当された浅井康宏氏が「セイヨウヒメミヤコグサ」として発表されたものと同一種である。(1987 浅井康宏 植物研究雑誌 第62巻12 p.370-P.372)。当時、筆者は同県坂出市に居住しており、たびたび当該貯木場に出向き観察していた。しかし、これよりも先に荒木徳蔵氏が1980年6月5日、宮崎県日向市細島港近くの路傍で本種を採集し、長田武正氏に同定を依頼した結果、初記録種として、当初ヒュウガミヤコグサ(ケミヤコグサ)として発表された(1980 荒木徳蔵 県立博物館研究紀要5)。また、後にケミヤコグサに訂正し記載されている(1984 荒木徳蔵 レポート日本の植物20)。

筆者は2013年6月11日、兵庫県姫路市南部のニュージーランド産のラジアータ松貯木場において、当該貯木場の角に堆積した脱落種皮と砂利等が混じった中で、大きくマット状に拡がり4～5株生育している本種を見つけた。同時に、ネビキミヤコグサ、シロツメクサ、ズメノナギナタも複数株が生育していた。上記、丸亀市の貯木場でも、ネビキミヤコグサ、シロツメクサが生育し共通種が見られた。ケミヤコグサは欧州原産であるが、すでに北米、豪州、南アフリカ等にも帰化しているよう

表 輸入香辛料倉庫周辺で記録されたその他の帰化種

和名	学名	原産地	日本帰化植物写真図鑑掲載
ホザキミチャナギ	<i>Polygonum ramosissimum</i> Michx.	北米	増改2巻 p.23
ムギセンノウ	<i>Agrostemma githago</i> L.	欧州	1巻 p.32
シラタマソウ	<i>Silene vulgaris</i> (Moench) Garcke	欧州	増改2巻 p.39
ヒナゲシ(原種)	<i>Papaver rhoeas</i> L.	欧州	1巻 p.83
アレチガラシ	<i>Hirschfeldia incana</i> (L.) Lagr.-Foss.	地中海沿岸	増改2巻 p.74
ハタザオガラシ	<i>Sisymbrium altissimum</i> L.	中央アジア～バルカン半島	1巻 p.113
シナガワハギ	<i>Melilotus officinalis</i> (L.) Pall. subsp. <i>suaveolens</i> (Ledeb.) H. Ohashi	アジア	1巻 p.140
ヒメアマ	<i>Linum bienne</i> Mill.	地中海沿岸	増改2巻 p.137
ドクゼリモドキ	<i>Ammi majus</i> L.	地中海沿岸	1巻 p.217
フランスゼリ*	<i>Bifora testiculata</i> (L.) Spreng.	南欧州	増改2巻 p.166
ニセツクヌキサイコ	<i>Bupleurum lancifolium</i> Hornem.	地中海沿岸	
ツクヌキサイコ	<i>Bupleurum rotundifolium</i> L.	欧州～西アジア	
ヒメウイキョウ	<i>Carum carvi</i> L.	欧州～西アジア	
ツルヤブジラミ	<i>Torilis nodosa</i> (L.) Gaertn.	地中海沿岸	増改2巻 p.168
ナガミゼリ	<i>Scandix pecten-veneris</i> L.	地中海沿岸	増改2巻 p.167
ミナトムグラ	<i>Galium tricorneratum</i> Dandy	地中海沿岸～西アジア	1巻 p.232
エダウチオオバコ	<i>Plantago psyllium</i> L.	欧州～西アジア	
カミツレモドキ	<i>Anthemis cotula</i> L.	アフリカ～ユーラシア	1巻 p.318
ヒメキンセンカ(原種)	<i>Calendula arvensis</i> L.	地中海沿岸	増改2巻 p.257
シュンギク(原種)	<i>Xanthophthalmum coronarium</i> (L.) P. D. Sell	地中海沿岸	
セイヨウヤマカモジ	<i>Brachypodium distachyon</i> (L.) P. Beauv.	北米	
ポウムギ	<i>Lolium rigidum</i> Gaudin	欧州～極東アジア	1巻 p.452
ドクムギ	<i>Lolium temulentum</i> L.	欧州	1巻 p.453
セトガヤモドキ	<i>Phalaris paradoxa</i> L.	欧州	1巻 p.462
アレチクサヨシ	<i>Phalaris paradoxa</i> L. var. <i>praemorsa</i> (Lam.) Coss. et Dur.	地中海沿岸	
ハマヒエガエリ(部分帰化)	<i>Polygogon monspeliensis</i> (L.) Desf.	北アフリカ～ユーラシア	

*別の荷役場所で記録



図4 シラユキキングヨソウ,
左：花序、右：花の拡大（'14.5.3, 神戸市）

である。

本種の侵入経路としては、山林から伐採された当該原木がトラック等で港湾部に運ばれ野積み状態で一時貯木される。その後、船舶に積み込まれる過程で周辺に生育する上記植物（種子）が付着し、輸入原木随伴種としてわが国に侵入帰化したと考えられる。原木は主に地方港に輸入されていたが、近年は原木輸入は著しく減少傾向にある。筆者が記録した、姫路市の当該貯木場は、2009年から操業を開始し、年間7、8隻の専用船で当該原木を輸入し、併設の工場において製材加工されていた。しかしながら、2014年1月の輸入を最後に、同年3月末で貯木場（工場）が閉鎖されたため本種の生育を見ることはできない。

なお、増補改訂日本帰化植物写真図鑑第2巻（2015年）97頁では、筆者が姫路市で撮影した写真に差し替えている。

輸入牧草

ハナガサモドキ *Verbena urticifolia* L.

本種は北米原産で、クマツヅラ科の短命な多年草、または2年生草本である。筆者は、2009年8月22日兵庫



図5 ツノミマツバゼリ（'10.5.8, 神戸市）

県宝塚市北部の酪農施設に隣接する道路脇で2株が開花状態で生育しているのを見つけた。状況からクマツヅラ属の新たな帰化種と判断した。同定の依頼を兼ねて植村修二氏に当該種の画像を送信したところ、上記の種とご回答をいただいた。植村氏によれば、同種は広島県山県郡北広島町にある牧場跡地で記録されているとのことであった。

筆者は上記の酪農家の方に乳牛の飼料について照会したところ、アメリカ産の輸入乾牧草を使用しているとの回答を得た。神戸港に輸入された当該牧草は、20フィートのコンテナに積載されており、その状態で当該施設に運送されてくる。手前の道路脇で小型トラックに積み替えられ牛舎まで運ばれる。この過程で、当該牧草に混入していた本種の種子が付着に分散し生育したものと考えられた。当該付近には、オオアワガエリ、カモガヤ、マカラスムギ、オニウシノケグサ、ムラサキツメクサ等の牧草の他、随伴種のウサギアオイ、トゲミノキツネノボタン等の生育も見られた。

筆者は、植村氏と広島県の同好者（T氏）の案内で以前から広島県へ植物観察に行く計画を立てていたが、その観察を2009年9月13日に行うことができた。当日はT氏の案内で、本種のわが国で最初の記録地である、広島県山県郡北広島町（旧芸北町）の八幡高原に向かった。当該場所は放牧場があった場所で広い草地からは離れて数か所、牧草を播種した形跡のない道端などに生育していることから、家畜に植物体ごと食べられて、種子のみ消化されずに排泄されて分散したものと想像された。筆者が記録した兵庫県宝塚市北部のものは、直接アメリカ産の乾牧草に随伴してきたと考えている。広島県のは放牧場に播種された輸入牧草種子の随伴種と想定したが、同国産の輸入乾牧草が補助的に使用されたことも考えられる。現在、宝塚市北部の生育地では、道路脇という特殊環境下で除草にあい開花しない年もあるが、生育を確認できる。

なお、全農教の増補改訂日本帰化植物写真図鑑第2巻（2015年）では、474頁の写真は、筆者が宝塚市で撮影したものに差し替えられている。



図6 イボミヤエムグラ（'10.5.8, 神戸市）

メキシコに見る日本の帰化植物

その 1 : メキシコシティ郊外 (テオティワカン遺跡)

川島和夫

メキシコは1997年に日本人移住100周年をブラジルよりも早く迎え、日本と長い交流がある国である。その人口は約1.2億人、国土面積は197万km²で日本の約5倍に相当し、スペイン語圏で最大規模である。メキシコの首都であるメキシコシティは赤道付近にもかかわらず、標高2,240mの高地にあるため、比較的過ごしやすい気候であり、雨季(5~10月)と乾季の2つの季節に分けられる。メキシコシティは高地に位置するため、朝は寒いが日中は暑くなり、一日の中に四季があるとも言われている。

私は1997年から1999年にかけて2年あまり仕事の関係でメキシコシティに滞在し、メキシコ全土で多くの野草を観察することができた。治安の関係から安全に撮影できるマヤ・アステカ遺跡やリゾート地周辺を中心にメキシコの植物を観察することになった。撮影した植物の名前を調べて驚いたことは、日本で北米や中南米原産の帰化植物といわれる野草の多さであった。沖縄だけでなく、西日本にも普通に見られるような帰化植物をメキシコの原産地で幸いにも撮影することができた。同時にメキシコ原産で園芸植物として有名なコスモス、ダリアやヒャクニチソウなどの可憐な原種の植物を見ることもできた。

今回はメキシコシティから北東約50kmに位置し、標

高2,300mの高原にあるテオティワカン遺跡の野草を紹介する。この遺跡は1987年に世界遺産に登録され、メキシコでもっとも巨大で有名なピラミッド(世界で第3位)であり、多くの観光客が訪れる。テオティワカンとは「神々の都市」という意味で、アステカ人が命名しており、紀元前2世紀から紀元6世紀まで繁栄した。私もメキシコ在住時に4回訪れ、2回太陽と月のピラミッドにも登ったし(図1, 2)、その都度、遺跡で野草と新たな出会いがあった。

ラテンアメリカの遺跡巡りでは写真撮影用三脚の使用が不可であることが一般的であった。テオティワカン遺跡でも入場料を支払い、遺跡内の見学と同時に野草を撮影しようとして三脚を使用していると監視官が寄ってきて注意された。要は遺跡を傷つける恐れがあること、もう一つが観光用写真を撮らせないために三脚使用が不可になっていると聞いた。そのように三脚が使用できない条件下、ピラミッド周辺に咲く可憐であるが力強い花々を夢中になって撮影した。遺跡周辺で最初に目に飛び込んできたのは、たくさんの北米原産のキク科のシロタエヒマワリ *Helianthus argophyllus* Torr. et A. Gray であった(図3, 4)。葉は肉厚で、草丈は2mを超えるものも多く見られた。



図1 太陽のピラミッド 高さ65m, 底辺222m × 225m

図2 月のピラミッドから太陽のピラミッドを眺める





図3,4 シロタエヒマワリ *Helianthus argophyllus* (キク科) 北米原産, 日本各地で野生化している, 撮影日: 1997年9月14日

足元では可憐な赤いマメ科の花を観察することができた(図5)。日本に戻り, ようやくこの植物が南米原産のナンバンアカバナアズキ類似種 *Macroptilium gibbosifolium* (Ortega) A. Delgado であることが判明した。メキシコのテオティワカン遺跡周辺で見た際にはかなり踏まれた様子であり, 10cm未満の草丈であり, キク科



図5 ナンバンアカバナアズキ類似種 *Macroptilium gibbosifolium* (マメ科) 北米南部~メキシコ原産, ナンバンアカバナアズキは沖縄で散見できる帰化植物, 撮影日: 1997年9月14日

の黄色の花とともに咲いていた。メキシコではこの遺跡以外ではメキシコ湾に面したベラクルスの海岸沿でも見た。同じ属のナンバンアカバナアズキ *Macroptilium lathyroides* (L.) Urb. は, 日本では沖縄で散見できる帰化植物である。

日本では関東以西で普通に観察できる帰化植物であるカタバミ科のムラサキカタバミ *Oxalis corymbosa* DC. は南米原産であり, メキシコでも普通に見られる野草であったが, 日本のように大群落になっている状態を見ることはなかった(図6, 7)。ムラサキカタバミは北米, 豪州や熱帯アジアなどに広く帰化しており, 日本へは江戸末期に観賞用に渡来して, 畑や空き地などに広く広がり難防除雑草になっている。私は日本各地でこの植物を見たが, 鹿児島県の沖永良部島のバレイショ畑で収穫時に驚くべき数のムラサキカタバミの鱗茎を見た。

センナリホオズキ類似種 *Physalis* sp. はホオズキ特有の実を着けており, メキシコ国内で広く見ることができた



図6,7 ムラサキカタバミ *Oxalis corymbosa* (カタバミ科) 南米原産, 撮影日: 1998年8月14日



図8 センナリホオズキ類似種 *Physalis* sp. (ナス科)
北米原産，撮影日：1998年8月14日

(図8)。また乾いた大地に力強く咲くトウダイグサ科のシヨウジョウソウモドキ *Euphorbia heterophylla* L. も観察できた (図9)。日本では沖縄などに広く帰化している。その他にキク科のタチアワユキセンダングサ *Bidens pilosa* var. *radiata* Sch. Bip. (図10) やイネ科のオヒゲシバ *Chloris virgate* Swartz. (図11) も見られた。熱帯アメリカ原産のタチアワユキセンダングサは別名オオバナノセンダングサとも呼ばれ、1840年代に観賞用に導入後、現在は九州南部以南で広く帰化し、サトウキビ畑の難防除雑草になっている。同じく熱帯アメリカ原産のオヒゲシバは世界の熱帯から亜熱帯に広く帰化しており、西日本の港湾付近で散見できる帰化植物である。



図9 シヨウジョウソウモドキ *Euphorbia heterophylla* (トウダイグサ科)
北米～アルゼンチン原産，撮影日：1997年9月4日



図10 タチアワユキセンダングサ *Bidens pilosa* var. *radiata* (キク科)
熱帯アメリカ原産，撮影日：1997年9月14日

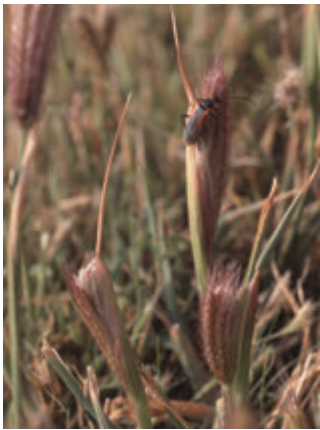


図 11 オヒゲシバ *Chloris virgate* (イネ科)
熱帯アメリカ原産, 撮影日:
1997年9月14日



図 12 ヒメヒヤクニチソウ
Zinnia pauciflora (キク科)
中南米原産, 撮影日:
1998年8月14日



図 13 オランダフウロ *Erodium cicutarium* (フウロソウ科)
欧州~西アジア原産, 撮影日: 1997年9月14日

園芸植物のヒヤクニチソウはメキシコが原産地であり、原種の一つであるヒメヒヤクニチソウ *Zinnia pauciflora* L. (中南米原産) を遺跡周辺や道端でも見ることができた (図 12)。北米原産のイネ科のカンザシスゲ *Bouteloua gracilis* (Willd. ex Kunth) Lag. ex Griffiths. も見ることができた (図 14)。カンザシスゲは別名メダカソウと言われ、風が吹くと乾いた大地を泳ぐメダカの群れのようなでもあり、日本では園芸植物として栽培・流通している。熱帯アメリカが原産でない帰化植物も多く見られ、欧州から西アジアが原産地であるオランダフウロ *Erodium cicutarium* (L.) L'Hér. は世界中に帰化している。メキシコでも観察でき (図 13)、日本では全国的に見られる帰化植物である。また草丈 10~30cm のシロガネチカラシバ *Pennisetum villosum* R. Br. ex Fresen. は遺跡周辺だけでなく、メキシコシティ市内でも普通に観察できた (図 15)。初めて見た時にはムギクサ *Hordeum murinum* L. と思ったが、穂の状態や草丈から判断して、最終的にシロガネチカラシバと同定された。シロガネチカラシバは北アフリカ、アラビアが原産地であるが、熱帯地方に広く帰化しており、メキシコの大地にとても馴

染んでおり、帰化植物という違和感は全くなかった。日本では園芸種名ギンギツネで導入され、その後に逸出して東京や千葉に帰化している。

今回、テオティワカン遺跡で見られて名前がわかった植物を紹介したが、撮影した中でまだ未同定の植物が多くあり紹介できないことは残念である。

最後に、今回紹介した帰化植物の同定にご指導頂きました植村修二先生ならびに今回の新企画のご提案を頂きました日本帰化植物友の会事務局の元村廣司氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七 2001: 日本帰化植物写真図鑑, 全国農村教育協会.
植村修二ら 2015: 日本帰化植物写真図鑑第2巻, 全国農村教育協会.
林弥栄・古里和夫監修 1986: 原色世界植物大図鑑, 北陸館.
富山稔・森和男 1996: 世界の山草・野草ポケット事典, 日本放送出版協会.
岩瀬徹ら 2009: 校庭の雑草, 全国農村教育協会.



図 14 カンザシスゲ *Bouteloua gracilis* (イネ科)
北米原産, 日本では園芸植物として栽培・販売されている,
撮影日: 1997年9月14日



図 15 シロガネチカラシバ *Pennisetum villosum* (イネ科)
北アフリカ~アラビア原産, 日本では園芸植物として導入後,
逸出して東京・千葉に帰化している, 撮影日: 1997年9月14日

近刊書および改装版新刊書の紹介

原色川虫図鑑 幼虫編
原色川虫図鑑 成虫編

幼虫編：谷田一三／監修，丸山博紀・高井幹夫／著

成虫編：丸山博紀・花田聡子／編



「川虫」という単語をご存じの方もいらっしゃるだろう。川虫とは河川に生息する水生昆虫のことで、カゲロウ・カワゲラ・トビケラを中心にトンボやゲンゴロウの仲間もこれに含まれる。最近、この川虫が環境に興味の深い方たちのあいだで、静かなブームになっている。

その理由は、たとえば河川がさまざまな原因で変化すると、そこに生息する川虫の種も変わってくる。以前採集した場所に同じ時期にでかけても、目的の川虫が採集できないことがある。見た目には何も変化していないようでも、川虫にとっては大きな変化が起きている

のかもしれない。人の目では知りえない自然の変化を、そこに生息する川虫が教えてくれているのである。また、川虫のなかには河川の上流域には見られるが、下流域には生息しない種もいる。流れが速い場所と遅い場所では、そこに生息する種も違って来る。河川を知ることが、川虫をより深く知ることにつながっている。このような生態をもつ川虫は環境調査に携わる人たちにとっては絶好の指標になる。また、釣りのなかでもとりわけ環境への知識の深さと生態への理解が求められるフライフィッシングでは、川虫はきわめて重要な地位をしめている。

全農教では2000年に「原色川虫図鑑」を発行した。これには川虫幼虫158種が掲載され、環境調査の専門家から自然愛好家、フライフィッシャーまで広く愛用されてきたが、多くの読者から成虫編のご要望が高まってきた。そこで今秋、川虫成虫350種を掲載した「原色川虫図鑑 成虫編」を発行することになり、あわせて旧「原色川虫図鑑」を「原色川虫図鑑 幼虫編」と改題・改装して今夏発行した。

幼虫編・成虫編ともに、生時の色彩や形態をありのまま表現した生態写真と、特徴を詳細に描写した細密図を多用して川虫の実体を忠実に再現している。また、検索表が充実し、識別・同定に役立つように作られている。

川虫は名前を知ることが比較的難しいことに加えて、幼虫と成虫が結びつきにくい昆虫だといわれているが、今回の出版で出揃う幼虫編と成虫編をセットで使うことによって、川虫の名前と一生がわかるようになる。

幼虫編は2016年8月発行，定価：本体3,800円＋税

成虫編は2016年11月発行，定価：本体6,000円＋税

送料有料化のお知らせ

全農教では、これまで弊社発行書籍の直販につきまして送料（運賃＋発送手数料）を無料にしていたりましたが、消費税、梱包資材の値上り等の諸事情により、送料を有料化させていただくことになりました。

直販ご利用の会員の皆様にはまことに申し訳ございませんが、なにとぞご理解いただけますよう、お願い申し上げます。

<送料>

お買い上げ本体価格合計 10,000円未満	1件 500円(税込)
お買い上げ本体価格合計 10,000円以上	無 料

●実施時期：2016年11月1日発送分以降

※送料は会員特典の割引販売にも適用されます。

なお今号添付のチラシでご案内させていただきました注文書による直販につきましては有効期限2016年12月31日のご注文分まで送料無料で扱わせていただきます。

●友の会会員の特典について

日本帰化植物友の会の会員の方には、全国農村教育協会発行の図書については、本体価格の1割引でお送りいたします。全国農村教育協会の図書で希望のものがございましたら、FAX、郵送またはメールで注文してください（会員番号は宛名シールの下に記載してあります）。※なお、この特典は書店を通じての注文には適用されませんので、必ず直接申し込んでください（代金は請求書、振替用紙を同封しますから、現品到着後にお支払いください）。

全農教・日本帰化植物
友の会事務局

〒110-0016 東京都台東区台東1-26-6
全国農村教育協会内

代表 TEL 03-3833-1821 FAX 03-3833-1665
事務担当 TEL 03-3839-9160

http://www.zennokyo.co.jp
e-mail: kika@zennokyo.co.jp